看護職部門

先輩が気付かせてくれたもの

看護職部門
入選

【大阪府・山家（やまが）いづみ】

看護師として働いて23年になる。今でも折に触れ思い出しては、現在の自分を振り返らせてくれる場面がある。

入職して5～6年目、手術室を経て外科病棟に勤務していた私は「自分は何でもできる」と自信過剰な時期であった。当時勤務していた病棟に、乳がん末期の女性が入院して来た。がんが全身に転移し、施す治療はなかった。ある日、いつもは穏やかな先輩看護師が廊下を走っている姿に急変を察知し、彼女を追い病室へ駆けつけた。

部屋は血の海だった。カーテンや壁に飛び散る大量の出血。がんが頸部の大血管を突き破った故の気管切開孔からの出血であった。「家族が来院し、納得するまでは続ける」との医師の指示に従い、心臓マッサージを続けた。心電図モニターの波形は両手を止めると直線になる。それでもマッサージの手を止めなかった。

娘さんが来院され、ようやく周囲の人の動きに目をやった。私の目に映ったものは、筆談用の紙に残された「くるしい」という患者の最期の言葉と、母親の変わり果てた姿に驚く娘さんの姿であった。そして患者の傍らには血まみれの患者の手をお湯で拭く先輩の姿があった。

こんな時に何をのんきな事を…。と思う私に「せめて娘さんに、手、握ってもらうねん。まだ温かいねんで」と言う先輩の言葉が突き刺さった。得意気に心臓マッサージを続けた自分が恥ずかしかった。先輩は救命センターから配属された救命のエキスパート。若い私など足元にも及ばないくらい知識も技術もある。彼女の言葉に、てんぐになっていた私の鼻がぽきっと折れた。涙が止まらなかった。

患者は何を必要としているか。あの患者に必要だったのは蘇生処置でも家族の納得でもない、ただ一人の家族との絆だった。あれから20年近く経つ。看護とは自己研さん。ゴールはない。あの時の先輩の姿が、慢心に陥りそうな自分をいつもリセットしてくれる。